

No 326

例会

- 三月八日(日) 九時 集合
- 場所 種河神社
- 三月二十二(日) 九時 集合
- 場所 種河神社

先送
奈南スポーツ社
0724(83)4653

奈南走ろう会

1. 大会案内

● 紀ノ川市桃源郷マラソン 4月5日

この大会今回が、第4回目となるもので以前は、桃山町桃源郷マラソンとして開催されていましたが、3年前に市町村合併により打田町、桃山町、貴志川町の3町が合併し、新たに紀の川市に地名変更したことで大会名も変更され今年が第4回大会となりました。又、距離も以前は、20kmだったり15kmだったりしていましたが、ハーフマラソンとして新たに行われているようです。コースも紀の川市として新たにトラック競技場が出来そこをスタート会場として紀ノ川の堤防を走り競技場に戻るコースのようです。競技場の場所は、山手にあるため最後は、結構キツイ坂となっているようです。又、入賞された方の賞品も一新し、後日、桃の季節に桃が送られてくるとの事です。しかし、私たちの様に遅い人には、あまり関係ないことではあります。

2. 大会結果

● 泉州国際マラソン 2月15日

今年の大会には、和田さん、堀池さん、西田さん、西野さん、森野さん、栗生さん、芝本さん、西さん、住吉さん、岡田、それに出向先の九州から今仁さんも参加されました。大会当時は、昨年の雪の舞う寒さとは違い2月の今頃の時期としては、少し暑い位の気温となりました。結果は既にお分かりかと思いますが、芝本さんは、女子一般の部で9位となり表彰されました。タイムも3時間29分25秒で泉南走ろう会として男子を入れてもトップとなっています。毎月の走行距離でも分かるように日頃の努力があるからだと思います。又、沿道から多くの方に応援を頂き本当に有り難うございました。

因みに、参加された人のタイムは、次の通りです。

西田さん	3時間36分56秒	岡田	3時間43分38秒
西野さん	3時間58分23秒	和田さん	3時間58分55秒
今仁さん	4時間18分30秒	住吉さん	4時間21分24秒
堀池さん	4時間24分00秒	西さん	4時間 ? 分
栗生さん	?	森野さん	?

別府大分毎日マラソン

保坂さんの2時間36分30秒



笑顔でゴールした保坂さん=田鍋公也撮影

1日があった第58回別府大分毎日マラソン大会(毎日新聞社主催)で、選手のランナーが輝きを放った。大会最年長出場者の保坂好久さん(60)は「静岡陸協」が、世界マスターーズ陸上のマラソン60歳以上の世界記録を1分45秒更新する2時間36分30秒(89位)でゴール。偉業達成に笑顔がはじけた。

レースだった。競技場

苦しくとも、楽しい

に戻って来た時はフラ

フラだったが、懸命に

腕を、首を振って前に

ルイン。市民ランナー

天島祥平

大会直前

競技場会に申請、認定

された時点で正式に世

界記録となる。マスター

ーズ陸上は59歳刻みで

カテゴリーが設けられ

ている。「次は65歳

ぎたら記録を狙うかな

あ。何歳まで? 行け

るところまで走り続

りますよ」

までの70。この1年は

別での世界記録更新

を目指し、1日30キロ

走り続けてきた。

この日は、保坂さん

の挑戦を知った沿道の

観客からも「世界記録

へ頑張れ!」などと声

援が飛んだ。

右ふくらはぎを痛め

るなど体調は万全では

なかつただけに「沿道

たために囲まれ「さすが

鐵人と熱い祝福を受

けた。

保坂さんは、36歳で

友人と駅伝チームを結

んで走り始めた。42歳

の時に地元での市民

レースで優勝。賞品の

ホノルルマラソン出場

旅行で初マラソンに挑

戦し、2時間31分19秒

の好記録をマークし

た。集団から離れた

ランナーたちが同じよ

うにサポート。「保坂

さん、行こう」。多く

の応援や支えを受けて

走りきり、「こんなに幸

せな市民ランナーはない

ない」と感激の面持

で振り返った。マスター

ーズ陸上は59歳刻みで

走り続けてきた。

この日は、保坂さん

の挑戦を知った沿道の

観客からも「世界記録

へ頑張れ!」などと声

援が飛んだ。

右ふくらはぎを痛め

るなど体調は万全では

なかつただけに「沿道

たために囲まれ「さすが

鐵人と熱い祝福を受

けた。

保坂さんは、36歳で

友人と駅伝チームを結

んで走り始めた。42歳

の時に地元での市民

レースで優勝。賞品の

ホノルルマラソン出場

旅行で初マラソンに挑

戦し、2時間31分19秒

の好記録をマークし

た。集団から離れた

ランナーたちが同じよ

うにサポート。「保坂

さん、行こう」。多く

の応援や支えを受けて

走りきり、「こんなに幸

せな市民ランナーはない

ない」と感激の面持

で振り返った。マスター

ーズ陸上は59歳刻みで

走り続けてきた。

「行こう」周囲のランナー後押し



ニッポン
jinmyaku@asahi.com 人・脈・記

ジンマク
jinmyaku@asahi.com

女が東京を走った④

師弟 命がけの五輪切符

ゼルス五輪の正式種目に〉
そのユースが、岩手にいた
佐々木（現姓永田）七恵（52）に
上京を決意させた。
「お詫びござい。」
「お詫びござい。」

さらに大方、男子について20を走ったことも。瀬古は「ちゃんと見たら、僕らも練習きついなんいえなかつた」

猛が先導し、茂が後ろから
「手を下ろせ」「息を吐け」。
サンディッチにされて走りこ
み、東京国際女子マラソンで力
を試す。88年、大阪のレースで

A black and white photograph of a man in a baseball cap and jacket carrying a large sack on his shoulders, walking through a field.

「は、走るとは何だ？」禪問答の
ような間いもあつけられた。
ある雨の日。練習の合間、風
邪をひくからこそで着替えなき
といわれ、佐々木は拒んだ。
女の私に外で脱げなんて。
は顔色を変えて怒った。「おれ
は70年生きて学んできたこと
を全部投げちと思つていいの
に、お前は一人」と言つた。こん
なのは本当の師弟ではない。
やがて若いライバルが台頭す
る。高校生でトラックの日本記
録を次々とつづいた増田明美。
（44だ。「おまえはまだ甘い」）。
佐々木の中村の叱咤は一段と
きびしくなつた。
むか打つよな猛練習にひた

A black and white portrait of Miyahara Misa, a woman with short dark hair, wearing glasses and a dark jacket, smiling.

宮原美佐子さん

A black and white photograph of Shigeo Furukawa, a middle-aged man with dark, receding hair and a prominent mustache. He is wearing a dark suit jacket over a light-colored shirt. The photo is set against a dark background.

「選手のやうに足が丈夫にな
てほしい」と両親は願つていた
富原はマラソン中継がある
びにテレビを見て、瀬古に挑
宗茂(55)・猛(55)双子兄弟のア
ンになる。宗兄弟がいる旭化
成に一般社員として入り、社
ショギング大会で出会った達の
指導者になつてからだ。
最初の4年は鳴かず飛ばす。
変身するのは宗兄弟が引退し
指導者になつてからだ。
「命がけで育てるから、お
前も命をかけるぐらゐの気持ち
でついてきてほしい」といわれ

をたちあげた天満屋のコーチに招かれる。選手の胸のうちを知るために練習後、必ず一人ひとりと向き合って話す。99年、東京国際女子マラソンに挑む山口衛里(35)に「絶対勝てる。五輪に行けるぞ」と心から返した。

不況で事業団の名門チームの廃部や休部が相次いでいた。「山口のあの優勝がなければ、うちのチームもなくなっていたかもしれない」と武富。

その山口はシドニー五輪で7位入賞。アーテネ・坂本直子(27)、北京に中村友理香(22)と、3大会連続で五輪ランナーが天満屋から育っている。(杉山圭子)

ーに練習できたから女子初の
輪に出られた。私のーの才能
5にもなったんです」

天満屋の監督、武富豊(54)は選手時代、瀬古や宗兄弟らと競った。92年、女子だけの陸上部